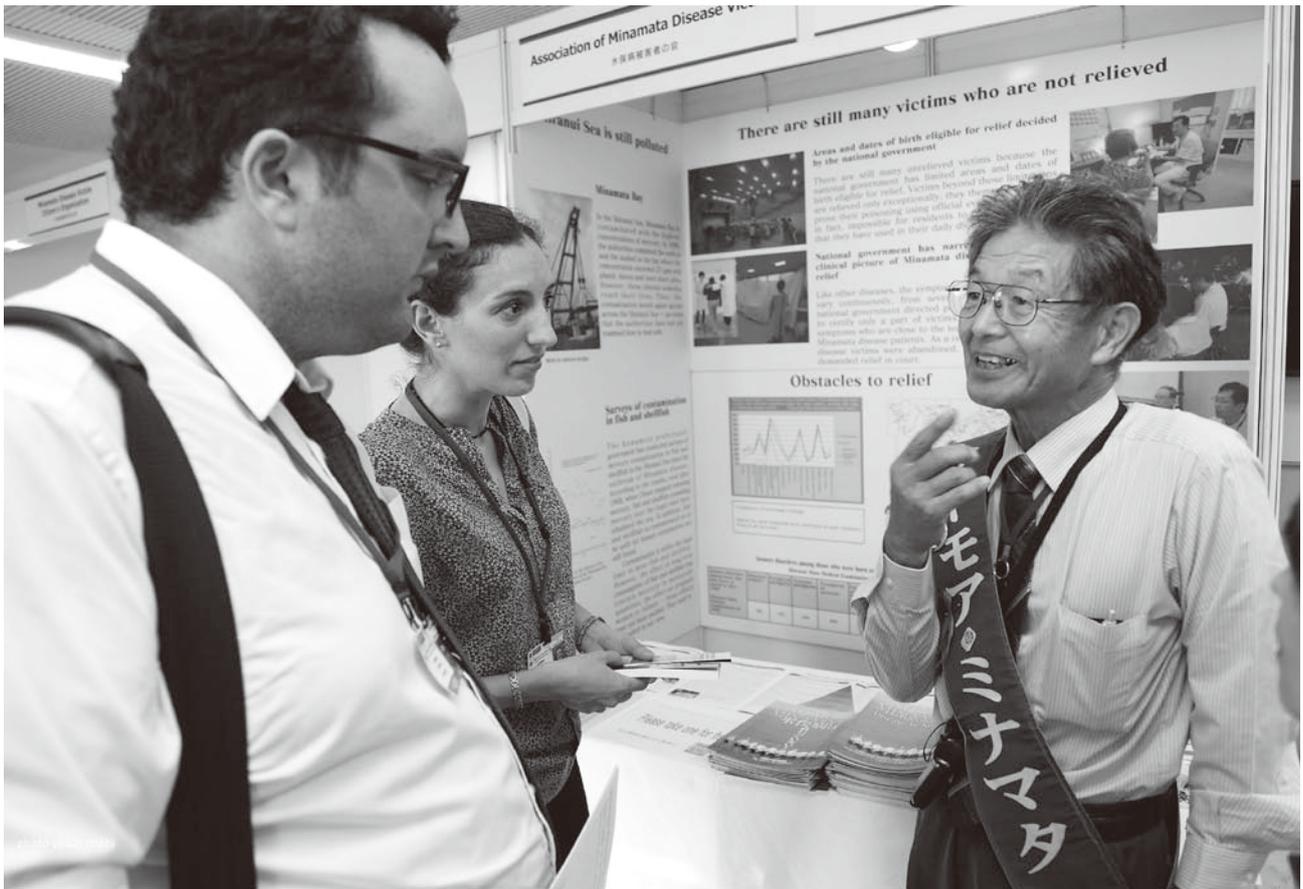


ノーモア・ミナマタを語り継ぎ、住みよいまちづくりを！

NPO みなまた



No.48 (2013年10月)



「水銀に関する水俣条約外交会議」情報発信ブースで訴える大石利生会長

(2013年10月9日・水俣市)

水俣病のいまを伝えようと、それぞれの被害者団体は、懸命に情報発信しました。水俣病不知火患者会は、「環境汚染は続いている」、「救済されていない患者が多数存在」、「救済は裁判で進められた」のテーマでパネル展示を行い、水俣病が終わっていないことを海外の参加者に訴えました。

写真：大畑靖夫氏提供



発行：NPOみなまた 発行責任者：藤野 紘 ☎867-0045 水俣市桜井町2-2-20

☎0966-62-9822 fax0966-62-1154 Eメール：npo@minamata.org <http://minamata.org/>

題字：江口 睦美

(カット：くさのあき)

ノーモア・ミナマタ第2次訴訟～第2陣追加提訴

ノーモア・ミナマタ第2次訴訟原告団団長 飯尾 正二

私たちの先輩は、2005年、国・県・チッソを相手にノーモア・ミナマタ国賠訴訟を起こし、提訴から5年半を経て、和解で解決しました。さらに、和解内容に沿った水俣病特別措置法の「救済措置」が確立され、原告のみならず多くの被害者の救済に貢献し、水俣病問題の解決に向けて大きな一歩を踏み出すことができました。

ところが、これですべての被害者が救済されたわけではありません。



◇特措法では救済されなかった被害者がまだまだ数多く残されています…

ずさんな公的検診や無理な資料の提出を求められ非該当になる人や、国、熊本県による天草、長島、出水など地域による線引き、そして年代による線引きの結果、多くの被害者が切り捨てられています。何よりも、私たちが強く反対してきた特措法受付の7月末締切りを強行したことにより、被害に苦しみながらも特措法に申請できなかった被害者が数多く放置されています。

◇やむを得ず、私たちは、ノーモア・ミナマタ第2次訴訟を提起しました…

6月20日に第1陣として48名が、そして9月30日に第2陣として132名が提訴しました。私たちは「すべての被害者の救済」のために活動を続けています。特措法が締め切られた今日、水俣病被害者として補償をさせるためには、裁判という方法しかありません。今後も、第3陣、第4陣と追加提訴を行います。特措法の審査が終わっていない方、水俣病の症状に悩まされながら放置されている潜在的な被害者が、熊本県、鹿児島県の内外に数多くいます。このことは、これまでの県民会議医師団の健康調査などでも、明らかになっています。

水俣病の歴史を振り返ってみれば、国、熊本県、チッソに切り捨てられ、葬り去られようとする被害者が必死の思いで立ち上がり、裁判などを通じて粘り強く闘うことで事態を動かしてきました。加害者である国、熊本県は、解決を望む被害者、住民の前に立ちはだかつてきたといわざるを得ません。

◇裁判の勝利と被害者救済の仕組みづくりを…

国、熊本県は、関係全住民の健康調査、環境調査を実施し、すべての被害者救済のために直ちに着手すべきです。しかし、残念ながら、国、熊本県にはそうした動きは見られません。

私たちは、ノーモア・ミナマタ第2次訴訟の勝利と、今後手を上げる被害者も救済される仕組みをつくるために全力を尽くします。

多くの皆様のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。

ミナマタ現地調査に参加して

原発事故の完全賠償をさせる会事務局長 菅家 新

「水俣の教訓を福島へ」。水俣の現地から私たちの会が発足するときにいち早く届けられた言葉でした。その意味することを、用意周到に準備された現地調査に参加して全身で合点を得て帰って来ました。

第一に、賠償の有無を「線引き」で行っていること。そしてその線引きは全くの机上論でしかないこと。水俣では、海上に線を引いている。海流や魚の生態、地域住民の生活様式には全く関係がない、事務的に地図の上で線を引いたものでした。原発事故では、原発を中心にした何個かの同心円を描き、それによって施策・賠償の区別（差別）をしています。それは、地形や天候、風向きなどは一切考慮されていません。



瀧洞山に登って不知火海を一望して、海流や魚の生態を全く無視した「線引き」の不当性を知り、現地の漁師さんと弁護士の掛け合い漫才のような話に大笑いしながらもしっかりとした地域での生活様式の説明で私たちを納得させるのは圧巻でした。漁師が捕った魚が地域の人たちの日々の食卓に上っていく日常生活が明らかにされ、地域での「線引き」や職業による「線引き」が如何に不当なものであるかが明確にされていきました。

第二に、汚染水の垂れ流しです。国はチツソ（東電）の陰に隠れて姿を現しません。責任をチツソ（東電）に預けて逃げています。国策としてのそれぞれの営業が一企業の営業として片づけられようとしているのです。国が責任を持ち、国が主導権を握って解決に向かわなければならないのに、それすらも国はしません。

そのような状況の中で、いくら交渉しても埒があかず、水俣の場合も福島の場合も裁判へと進んだのです。そしてその裁判の行方を決めるのは、どれだけ多くの人が原告になるのか、と国民の世論の広がりやどれだけあるのかという点であるということです。

現地調査から帰って来ると、東京へのオリンピックを招致する活動が活発になって行きました。福島原発事故は収束どころか基本的な工事でさえ遂行されていないのに、安倍首相は「原発は完全にコントロールされている」とか「汚染水は完全にブロックされている」などと世界の人たちに大嘘をつき、「東京は250キロ離れているから大丈夫だ」と福島県民を切り離してしまいました。怒り心頭に発す！とはこのことだと思います。日本国民を視野に入れたオリンピックなら大歓迎です。しかし、このような嘘の上に成り立たせている成り行きには憤りを感じています。福島県民は怒っています。

日本の歴史上最大の公害としての原発事故を、住民サイドでの解決を目指して、困難な闘いになってはいますが、皆さんとともに手を結んで、解決の糸口を一つ一つ見つけていきたいと思っています。現地調査ではお世話になりました。ありがとうございました。

国際水銀会議に参加して

水俣協立病院医師 板井 陽平

こんにちは。協立病院の板井陽平です。母・板井八重子から二代続いて水俣の医療に携わっております。協立病院では、外来・往診・人工透析などを担当しています。日頃からNPOみなまの皆さんには大変お世話になっております。



今日は、先日英国エディンバラで行われた国際水銀会議への参加報告をさせていただきます。

この会議では、地球環境汚染物質としての水銀について、医学、公衆衛生学や化学、工学など様々な分野の学者が集って、自身の研究の成果をポスターや口演で発表されました。2年に一度開催され、過去には水俣で開催された事もあります。

今回は、協立クリニックの高岡滋院長と私の2名でこの会議に参加しました。2009年、2012年に水俣、出水、天草で被害者団体や医師団で行った水俣病の一斉検診について発表しました。2009年、2012年のいずれにおいても、受検者の9割程度に水俣病の症状が見られたこと、多くの人が差別や偏見を恐れて検診を受け控えていたこと、わが国の「救済」基準が居住期間や汚染地域の指定のいずれも被害の実態を反映していない不十分なものであることなどを発表しました。

水銀汚染の患者を対象としたこれほど大規模な研究は例がなく、大きな関心が寄せられました。改めて水俣病の被害規模の大きさを認識しました。ただその反面、水俣の現場から出された演題は少なく、日本・水俣からより多くの情報を発信する必要があることを痛感させられました。

他国での研究に目をやると、子供を中心とした微量水銀汚染での脳の発達への影響についての議論が目を引きました。発達に影響を与えるほどの量の水銀として問題になるのは、マグロなどの大型魚です。ただし、魚に含まれるDHAなどの不飽和脂肪酸のプラスの影響もあるため、子供に魚介類摂取を制限すべきかどうかについては未だ諸説あるようでした。ただし、水銀が精神・神経・発達に影響を及ぼす

ことは明らかな事実です。妊娠中の大型魚摂取については引き続き慎重であるべきでしょう。

また、交流会では韓国・ブラジル・中国・ロシアなどの研究者と交流を持つことができ、今後の研究に広がりを持たせることができました。

次回は2015年に韓国で開催されるとのことですので、是非もっと多くの演題を発表したいと思いを新たにしました。



写真展「100人の母たち」を開催して

エコネットみなまた 大澤 菜穂子

今年1月ここ水俣で「100人の母たち」という写真展を3日間行いました。開催から8ヶ月ほど経ちましたが、私たちがどんな想いでこの写真展を行ったか、なぜこの写真展を開催したかったのか、少しお伝えできたらと思います。

この写真展は、福島第一原発の事故後、東日本から福岡などに避難してきた、また福島にいる母親と子どもの姿を見つめた写真家・亀山ののこさんの写真集「100人の母たち」からの写真23点ほどを展示したものです。すべて母と子の写真です。子どもをきゅっと抱きしめる者。子どもと微笑む者。ただ、彼女達は環境や思想はちがえど、原発事故後子どもを守りたいと声を上げた母親達です。写真に写っているお母さん達のメッセージも写真に添えられました。

「母として出来ることは全てやりたい」

「子どものそのまた子どももずっと安心してくらし続ける世界になりますように」

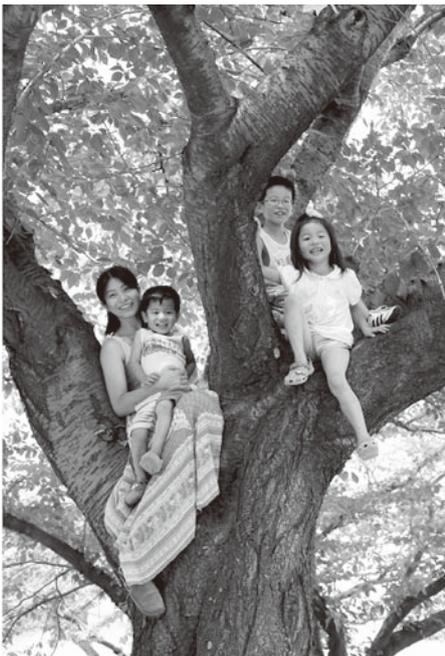
写真家の亀山さん自身も、原発事故の後、当時生後6ヶ月だった双子の息子たちと福岡県に避難しました。東日本大震災から2年6ヶ月が過ぎ、今だに余儀なく避難生活をしている人達は29万にのぼります。遠く離れた水俣で、ともすれば忘れられようとする震災や原発事故。もう一度私たちの問題としてとらえ、今でも大変な状況下にいる人達にせめて心を寄り添うことはできないか。お母さん達が子ども達を連れてどんな思いで避難しているのか。そして、この写真展を通じて、原発のこともう一度自分たちの生活などについて考えるきっかけにしたいと、水俣・芦北地域の20~30代が10名ほど集まり、この写真展開催に向けて準備を進めました。震災・原発というテーマの写真展開催当日まで集客など心配は尽きなかったのですが、予想以上の方に来場いただきました。

ただ、写真展の準備を進めていく中、実行委員の中でも震災や原発への見方はそれぞれ異なりました。それでも、何がそれぞれの背中を押しました。

私自身の背中を大きく押したのは、ある原発集会の行進で私の前を歩いていたおばあちゃんとの出会いです。腰は大きく曲がりながらも「原発反対」と声を出し一歩一歩ゆっくり歩を進めるおばあちゃん。これからの未来を誰かにお任せするのではなく、1人ひとりの意思と行動が社会を作っていく、といわんばかりのおばあちゃんの勇姿に大きな力をもらいました。

そして、もう1つの写真展への原動力になったのは、これまで原発にたより、何もかもボタン1つの便利な生活を追い求め、人間中心の都合のいい社会を作り続けた社会の一員である自分へ遅ればせながら気づかされたことです。

今、仕事の合間に、修学旅行や学習旅行で水俣に来る中学生や高校生に、水俣を伝えることをしています。水俣一福島、たくさんの共通点もあります。経済優先社会、つまり私自身も求めた社会によって起こされた水俣病や原発事故。過去を学び、未来を作る。ここ水俣で、これからも子ども達へ水俣をしっかりと伝えていくことを丁寧にしていこうと思っています。先日水俣の写真展を見に来た人が、今度は彼女の住む町でこの写真展をすると、嬉しい連絡が入りました。社会を変えていく。大きなことはできませんが、一人一人の小さな積み重ねで社会は確実に変わっていくと信じています。



亀山ののこさん提供

100歳おめでとうございます



敬老会の余韻が残る9月24日の午後、職員が忙しく授与式の準備を行っています。今日の主役は、入居者の江口キトさん。現在99歳。年度明けに100歳になられる方に、内閣総理大臣から感謝状が贈られます。

長男さんご夫婦が来られ、キトさんも着物に着替えられ準備万端。緊張しているのはキトさんではなく職員のほうがソワソワ。キトさんは、いつもと変わらず腕組みをしてウンウン…。

他の入居者のかた、職員、ご家族に見守られながら、終始和やかな中で授与式が終わりました。その後のお茶会で、長男さんご夫婦からキトさんの話を聞かせていただき、キトさんの新たな一面を知ることができました。家族へ愛情を送り、家族から愛情を受けながら生きることの素晴らしさを学ばせていただいたと思います。

キトさんの口癖の「ヨイヨイ」とキトさんが奏でる三味線の音が、いつまでも「キトさん家」に聞こえますようにと心から願う一日となりました。キトさん、本当におめでとうございます。「キトさん家」でいつまでもお元気に過ごしてください。

グループホーム キトさん家 管理者 棚橋 慶

敬老会

キトさん家で働くようになってもうすぐ1年。敬老会は初めての経験でした。入居者様ご家族やご近所の皆様においでいただき、過去最大の42人の参加で盛大に行われました。

入居者さんの娘さんが、入居者さんお一人お一人にお化粧をすると、いつもとは違う「女性」の顔に…。とても素敵に変身です！

「きれいですね」と声かけると「からかわんと。私はよかったとに（からかわないで。私は化粧しなくて良かったのに）」と下を向いています。のぞき込んでみると恥ずかしそうだけど嬉しそうな表情をされています。おもわず“かわいい！”と思いました。大先輩に対して失礼かな…。

心づくしのごちそうとご家族による踊りや民謡の披露。男性職員によるお笑いマジックショーなど。皆さんの笑い声がキトさん家いっばいに広がりました。とても楽しい敬老会になりました。

来年は、もっと楽しんでいただけるような敬老会にできたらと思いました。

グループホーム キトさん家 中食 有希子（介護福祉士）



認知症サポーター講座を受け、学び感じた事

ご近所の皆さんにも来ていただき、三郎の家で「認知症サポーター講座」を開催しました。

認知症になると、考えるスピードは遅くなるが、時間を掛ければ、答えを出すことが出来るので、急がせずに待つことが大切です。また、何も出来なくなる訳ではないので誰かが目を配り按配さえすれば作業を上手に行えます。そのような事から、私達は、いかに作業しやすい環境を作るかという事を考え、工夫しなければならないのだと思いました。

それに加え、認知症の人は情報の記憶は失っても感情の記憶は強く残るので、私達は、悪い感情を持たれないよう話し掛け方や対応には気を付け、決して自分の感情をおつけてはなりません。

今回、受講して、周りで困っている方や助けを求める方がいたら自分に何が出来るのかを考え、小さな事でも力になれるように手助けできたらと思いました。今後も、認知症について多くの方に伝えていけるよう更に知識を深め、利用者様の生活がより良いものになるよう、活かして行きたいです。



グループホーム 三郎の家 塘 愛

☆☆ 地域の敬老祝賀会

9月15日に地域の敬老祝賀会に、9名の利用者様と参加させていただきました。

名護の漁港で、大勢の地域の方々が参加され米ノ津中学校の吹奏楽部の生徒さんの演奏に始まり、余興がありました。三郎の家のスタッフも、歌とダンスの余興を1曲行い、最後に敬老のお祝いの言葉を述べさせていただきました。利用者様も、手拍子や手踊り、音楽に合わせて歌ったりと楽しまれていました。三郎の家に帰ってから、利用者様にスタッフから言葉をよせたカードを贈り敬老のお祝いをしました。



皆様が、健康で日々を大切に過ごせたことを祝えたと思います。

グループホーム 三郎の家 管理者 山田 静香

ビデオ「水俣病は終わっていない」制作記…布計（ふけ）地区を取材して

ひまわりソフトウェアデザインズ 大畑 靖夫

水俣病が公式発見されたといわれる昭和31年は私の生まれた年でもあり、水俣病はなぜか人ごととは思えません。今から20数年前、会社勤めだったころ、労働組合運動の一環として水俣病第三次訴訟の支援（熊本支援連）をしていた頃に比べると、社会情勢は大きく変化しています。

ビデオ制作のための取材は約20回、数十時間を撮り溜めました。中でも印象に残ったのは、鹿児島県伊佐市布計地区を取材した時のことです。

鹿児島県伊佐市は、かつては金鉱山で栄え、村の最盛期には100世帯以上があったといえます。水俣駅から国鉄山野線が走り、県境を越えた最初の村が布計集落です。伊佐市の西本國昭さん、出水市の原告の柗迫正一さん、旧国鉄マンの原島三男さん、草野要作さんに案内して貰い、初めて布計地区に足を踏み入れました。取材の機会がなかったら、おそらく一生ここを訪れることはなかったと思います。

取材会場の公民館では、手作り料理をたくさん用意し、遅れて到着した私たちを温かく迎えて貰いました。昔から伝わる草餅、ゴーヤの酢漬け、自家製漬け物、新鮮なトマト、どれも美味しくいただきました。一番心配したのは、水俣病の患者として知られても良いのだろうか？ということでしたが、「悪いことをやったわけではないのだから」と、快く取材に応じてもらい、昔の楽しかった思い出、苦しかった体験が堰を切ったようにあふれ出て、自然な表情をそのままビデオに収録することができました。

毎日のように、水俣から運ばれる無塩（ブエン）と呼ばれる「新鮮な魚」を行商人から買って食べていたというのです。たくさんの行商人が、現在は廃線となった旧国鉄「山野線」に乗って伊佐市の布計地区まで水俣の魚を売っていたといえます。なぜ、こんな水俣から遠く離れた山間部で水俣病の症状に苦しむ人が多いのか、やっと納得できました。

水銀に汚染されているとは知らず、水俣の魚を毎日のように食べ続け、手先のしびれや足の痙攣（けいれん）など、水俣病に共通する症状にずっと苦しみ、「奇病」という診断を受けて半世紀以上を耐えてきた人びとだったのです。自分たちが水俣病と同じ症状であることは、昨年（2012年）熊本県民会議医師団による集団検診を受けて、初めて知ることになるのです。取材中も、何度も手足をかばうような仕草をされていて、今も症状に苦しんでいる様子が伝わってきました。しかし、国の水俣病患者発生の実態を無視した地域や年代の線引きによって、救済の枠から外されてきたのです。

今回制作したビデオ「水俣病は終わっていない」を通して、国民の理解が得られる助けになればと思います。すべての水俣病患者の救済のために、自分が水俣病患者であることを隠さず、ビデオに堂々と登場して下さった人びとの覚悟に、私たちは応えていかなければならないという思いを改めて強く感じました。



編集後記…まだまだ、水俣病被害者は残されています。その現状を伝えるDVD「水俣病は終わっていない」をご希望の方に実費のみでお分けします。NPOみなままでご連絡ください。(0966-62-9822)